

館林城下町の歴史的変遷と地域構成

関戸明子・木部一幸

I. はじめに

II. 館林城下町の歴史的変遷

- (1) 綱吉時代までの城下町の発達
- (2) 幕末までの城下町の変化

III. 館林の城下町プランの特色

- (1) 寺社の配置
- (2) 町人地の町割と屋敷割

IV. 館林の町人地の地域構成

- (1) 町の支配構造と天王祭
- (2) 町人地の機能と地域構成

V. おわりに

I. はじめに

戦国期から近世初期にかけて全国的に建設された城下町は、封建都市の典型として、さまざまな分野から研究されてきた。そのなかでも、矢守の呈示した城下町プランの変容系列に関する類型は、城下町研究に大きな影響をもち続けている。そこでは、城下町プランを最も外側の囲郭と城内・侍屋敷地区・組屋敷地区・町屋地区などの相対的配置関係にもとづいて、①戦国期型、②総郭型、③内町・外町型、④郭内専士型、⑤開放型の5類型に分類した。また、この城下町プランが①→⑤へと変容していくことを多くの事例を検討しつつ明らかにした¹⁾。さらに、町人地の町割を縦町型と横町型という二つの類型に、町人地の屋敷割を江戸型と京型という二つの類型に分け、それぞれの変容系列についても考察し

た²⁾。

この類型について、宮本は、城下町計画当初の計画理念として内町外町型が存在したかは問題があり、総郭型と町郭外型(郭内専士型)に集約が可能であるとした³⁾。これに対し、金井は、内町外町型では寺町の形成が不明確で、郭内専士型では寺町で囲繞されるタイプが多いことを指摘し、前者が寺院統制を行わず家臣団と商工業者の紐帯を持続した中世的な残滓をひきずった型、後者がそれを払拭した型と捉えた⁴⁾。

本稿では、これらではあまり議論されていない総郭型プランである上野国の館林を取り上げ、類型論の一助となるように、その城下町プランがどのような特色を持つのか明らかにしていきたい。これまで、館林城下町の研究については、館林教育委員会により館林城の城郭の変遷が分析されている。しかし、町人地を中心とした城下町の地域構成については論じられていない。それゆえ、本稿で、館林城下町の地域制、町割と屋敷割の空間類型を分析し、その変化を究明することは意義を持つ。

次に、具体的な考察に入る前に、基本的な史料について述べておきたい。館林城下町に関するものには、戦国時代の築城と伝えられる館林城の起源から越智松平氏による城郭再築までの館林の盛衰について記述した『館林記』がある⁵⁾。『館林記』は、編纂年代が不明であるが、城下の古老が徳川綱吉に献上した

旧記を資料として編纂したものである。

館林城の城郭および城下町の絵図については、館林教育委員会による調査が行われている⁹⁾。この調査の対象となった31枚の絵図の大半は城郭図で、城下を描いていたとしても模式的な縄張りが示されているにすぎない。そこで、本稿では、異なる時期のプランを比較できるように、城下町全体の地域制が読みとれ、精度が高いと判断した2枚の絵図と、この調査の対象外となった城下のみを描いた2枚の絵図を中心に分析することにした。それは次の4枚である⁷⁾。

- ①大給松平時代(1644~61)「館林城絵図」
- ②延宝2年(1674)「館林城下町絵図」
- ③秋元時代(1845~69)「館林城絵図」
- ④嘉永元年(1848)「館林城下地図」

①は、正保期に描かれたと推定される。それは、この絵図に記載されている盛岩寺が、大給松平家の菩提寺であり、大給松平氏の転封のたびに移転されたことからいえる⁸⁾。大給松平氏の入封は正保元年(1644)で、これによって徳川綱吉入封以前の館林城下町の全体像を知ることができる。②と④は、城郭を除く城下について、町屋や寺社、侍屋敷などの地域制が示されたもので、町名や寺社名、さらに町人地の屋敷割と一軒ごとの名請人が記載されている。④のみに、御用地と寺社地が彩色されているという違いはあるが、全体として、この二つの絵図の形式は酷似しており、昭和初期の実測図に比定した結果、かなり正確に作成されていることがわかった。③は、町人地の屋敷割がみられず、地域制が簡略化されて示された絵図であるが、秋元氏支配の幕末の館林城下町の全体像を知ることができるものである。

II. 館林城下町の歴史の変遷

(1) 綱吉時代までの城下町の発達

館林は、上野国の東部、渡良瀬川と利根川が形成した沖積低地に挟まれた台地に位置す

る。城郭部の標高は約20m、町人地の標高は23~24mである。館林の周囲には、城沼をはじめとする大小の沼や低湿地が点在し、こうした位置は城地として最適の防衛的機能をもっていた(図1)。館林の歴代藩主は、表1に示したように、他の関東諸藩と同様、領主が頻繁に国替えを命じられ、老中などの要職に就くものも多く、在地性に乏しかった。ここでは、天和3年(1683)から24年間にわたる代官支配を区切りとし、城下町の歴史の変遷について述べたい⁹⁾。

館林城の築城は、天文元年(1532)赤井照光に始まるとされる。赤井氏は青柳から大袋、さらに館林へと居城を移し、かつて青柳にあった佐貫町350軒ほどを館林に移転させた。赤井氏は、永禄5年(1562)上野国に侵攻した上杉謙信の攻略によって追放され、代わって足利城主の長尾顕長に館林城は預けられた。

館林に入った長尾顕長は、侍屋敷を囲郭に収めるため城郭拡張を計画した。城郭の南東部は城沼に遮られており、北に城地を拡張するため、町を城の西に移すこととなった。当時の状況は『館林記』に次のように描写されている¹⁰⁾。

「元亀元午(1570年一筆者注)十二月ヨリ但馬守(長尾顕長)受取、夫マデノ町ハ佐貫町ト申、外加法師ノ辺ニアリ、当地其節ニモ町分ニハ相ナラス、公儀江願上御代官トシテ小林彦五郎御出町、町家割立、右町人之外五ヶ村百姓、町人トナリ当郷村、成島村、谷越村、小桑原村、足次村、台宿ハ足次ノ古名(小名)ニテ合ワセテ五ヶ村、連雀町、並木町、堅町ハ佐貫町ニアリシ町名ナリ、足利町ハ彦五郎足利出之人故、住居之町ハ夫ヨリ足利町ト名付申候」

これによれば、城の北部の^{そとかぼろし}外加法師付近にあった^{さぬき}佐貫町を移転するとともに、当郷村・成島村・谷越村・小桑原村・足次村の5村の百姓が移住し、連雀町・並木町・^{たつまち}堅町、代官小林彦五郎の出身地にちなんだ足利町といっ

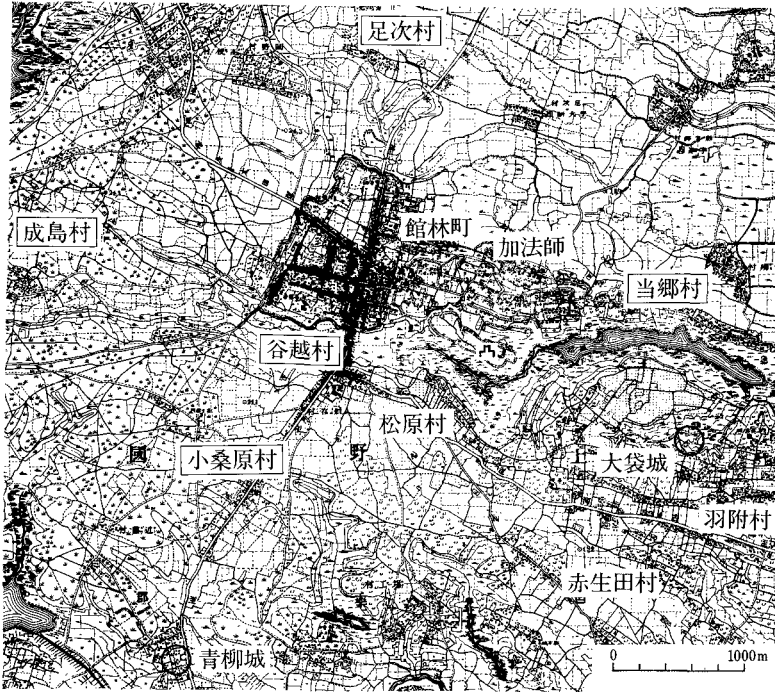


図1 館林城下町とその周辺

原図は明治17年(1884)測量2万分の1「館林」図幅

表1 館林藩の歴代藩主と石高の変遷

藩主名	石高(万石)	期間	年数	
榊原	康政	10.0	天正18年(1590)～	16
	康勝	10.0	慶長11年(1606)～	9
	忠次	10.0→11.0	元和元年(1615)～	28
番城時代		寛永20年(1643)～	1	
松平(大給)	乗寿	6.0	正保元年(1644)～	10
	乗久	5.5	承応3年(1654)～	7
徳川	綱吉	25.0	寛文元年(1661)～	19
	徳松丸	25.0	延宝8年(1680)～	3
代官支配		天和3年(1683)～	24	
松平(越智)	清武	2.4→5.4	宝永4年(1707)～	17
	武雅	5.4	享保9年(1724)～	4
太田	資晴	5.0	享保13年(1728)～	6
番城時代		享保19年(1734)～	6	
太田	資俊	5.0	元文5年(1740)～	6
松平(越智)	武元	5.4→6.1	延享3年(1746)～	33
	武寛	6.1	安永8年(1779)～	5
	斉厚	6.1	天明4年(1784)～	52
	井上	正春	6.0	天保7年(1836)～
秋元	志朝	6.0	弘化2年(1845)～	19
	礼朝	6.0	元治元年(1864)～ 明治2年(1869)	5

『館林市誌 歴史編』(1969)・『群馬県史 資料編16』(1988)より作成

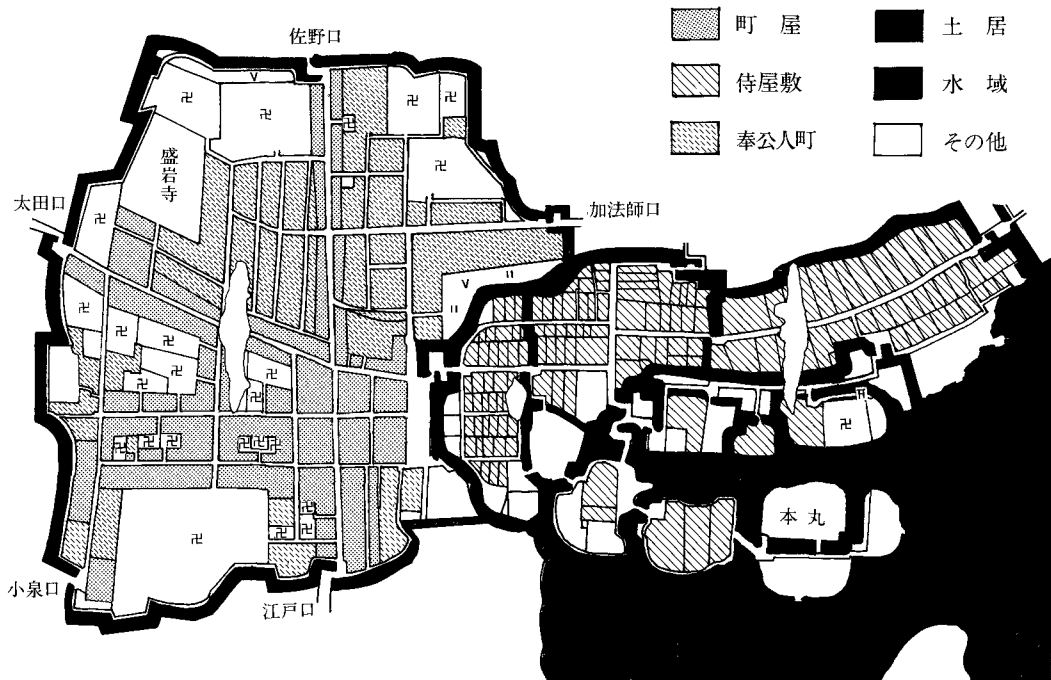


図2 正保期の館林城下町の地域制 (大給松平時代「館林城絵図」より作成)

た町が成立したことがうかがえる。

天正12年(1584)館林は北条氏直の支配に入ったが、天正18年(1590)には豊臣秀吉の軍勢により館林城は攻略された。そして、徳川家康の関東入国にともない、同年、榊原康政が館林城主に任命され、館林藩が誕生した。家康の関東入国による家臣団の中で、箕輪12万石の井伊直政、館林10万石の榊原康政、大多喜10万石の本多忠勝の重臣たちが、江戸の守りを固める形で配置された。

館林に入った榊原康政は、城下町の西のはずれを走っていた小田原街道を町の中心に移し、南北道路を通して、町を発達させようとした。文禄4年(1595)には、城下町を囲む惣構えの工事が完成し、慶長2年(1597)には、南北の大通りが貫通し、北に佐野口門、南に江戸口門が置かれ、東の加法師口門、西の太田口門、南西の小泉口門と合わせて、5ヶ所の門と呼ばれるようになった。この間の状況は『館林記』には、

「榊原小太夫(榊原康政)拝領ノ後、段々

普請モ出来、……町囲ノ城普請文禄二^(ママ)巳二月十一日ヨリ村々人足出ル、……同四年未十月迄ニ普請モ出来ス、町人モ追々居住イタシ申候」とある¹¹⁾。

こうして、文禄期には、惣構えに包含された総郭型の城下町の完成をみるようになったのである。そして、慶長期に城下の中心に移された南北の大通りは、後に日光脇往還と呼ばれるようになる¹²⁾。なお、館林城下のすべての町は地子免除である。検断の史料には、屋敷年貢などの諸役は、往還の人馬役を勤めることで免除されたとある¹³⁾。こうして日光脇往還を城下に組み入れ、地子免除によって城下への集住を促して、町立てが完成されたと考えられる。

榊原氏の築いた初期の城下町の形態は、正保元年(1644)に館林に入った大給松平時代の絵図によって推測できる。図2をみると、本丸・腰曲輪などが城沼の中に築かれており、二の丸以下の郭にも大身の侍屋敷が位置している。その外側には侍屋敷地区の広がる郭内

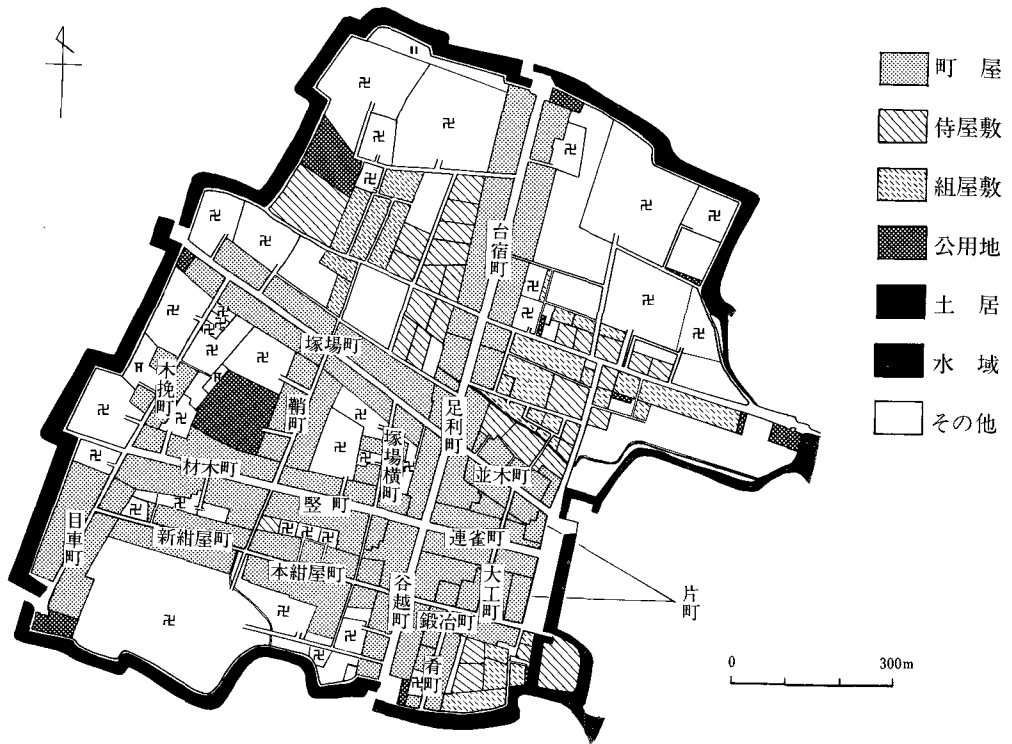


図3 延宝2年(1674)の館林城下町の地域制(徳川綱吉時代「館林城下町絵図」より作成)

がある。そして、大手門の外側には町屋地区が建設され、惣構えが城下町全体を取り囲んでいることがわかる。

町屋の配置は、大手門と太田口をつなぐ太田往還と佐野口と江戸口をつなぐ日光脇往還を中心に展開されている。太田往還の南では、碁盤型のブロックがみられ、その中央の閑所に寺院が位置することがわかる。惣構えの内部は町屋のみで充填されているのではなく、奉公人町や寺院が大きな面積を占めている。このように、郭内に侍屋敷、総構え内の主要街路沿いに町屋、その周縁部に組屋敷と寺町が配されるという明確な地域制が確立された。

徳川綱吉の時代、館林は最盛期を迎えたといわれる。『館林記』には、次のように述べられている¹⁴⁾。

「諸子百家旗本小従人陪臣ノ奴僕数万人軒ヲ並へ往来ノ人満チ満タリ、御本丸殿室ヲ初メニノ丸、三ノ丸、大名小路ヨリ城ノ内外ニ居余リテ、加法師、土橋、丸屋敷、町裏、荒

宿ノ先マテ同心小路割ナラへ、館林ノ繁盛例ヘンニハサナカラ江戸ノ全盛ニ等シカランヤ」

この記述や城郭絵図からは、徳川綱吉が25万石をもって館林に入封した際、城郭の北部の加法師付近に新たに組屋敷をおき、その部分も堀で囲う拡張工事を行ったことが推察される。しかし、綱吉自身が館林に入城したのは、日光での家康50回忌の法要の帰り道に立ち寄った際の4泊だけ、さらに江戸の神田館詰めの士分以上の家臣500人に対し、館林在城の家臣はわずか22人、与力・同心・手代・組頭などを加えても290人であったので¹⁵⁾、この時期に城下町が著しい発展を遂げたとは考えにくい。

さらに図3によって、延宝2年(1674)当時の町屋地区の形態を確認する。この絵図には、^{やごえ}谷越町以下18の町と戸数2軒の風呂屋町が記載されている。図2の町屋地区と比較すると、木挽町が新設され、目車町が拡大している一方、塚場町が若干縮小していることが

わかる。しかし基本的にはその形態はほとんど変わっていない。

むしろの間では、町屋地区以外の変化が大きい。広い面積を占めていた奉公人町が縮小し、一部の組屋敷が残っている以外は、侍屋敷が置かれたことがわかる。これは、組屋敷は拡張された郭に移されたものの、郭内に収まらない家臣の屋敷が生じたためと考えられる。なかでも、盛岩寺跡にある城代金田遠江守の下屋敷は、約3000坪という規模であった。その周囲には、蔵屋敷と手代の組屋敷が配されている。そして、数多くの寺院が惣構えに隣接した部分や町屋の背割りの部分に位置し、材木町の北には牢屋敷、5ヶ所の門には門番屋敷が置かれている。北部には「空地」が散在し、一ヶ所だけ田地がみられる。したがって、綱吉時代になると、侍屋敷が町屋地区に隣接するなど、用途別の地域制がやや弛緩したといえる。

(2) 幕末までの城下町の変化

綱吉が将軍職に就くと、館林藩はその子徳松丸が継いだ。しかし徳松丸が5歳で亡くなると、館林城は破却され、その城跡は「貞享元子年(1684)新田畑ニ仰付ラレ……知行七百石ノ余トナル在家水呑トモニ御割渡下サレ」⁶⁾とあるように、耕地となり、24年間の代官支配に入った。

破却された城郭の再築は、越智松平氏によって進められた。大給松平氏の城絵図を参考にして、館林城の縄張りがなされ、各郭の造成が行われた。以前の縄張りは、郭が細分化された戦略的要素の強いものだったが、越智松平氏以降の縄張りは単純化された。この変化は、政治的な機能の重視や財政的な理由などによると考えられる¹⁷⁾。

綱吉時代の町屋の戸数は806、人口は3,739であったが、5～6万石の大名による支配になって以降も、館林では町屋の戸口はほとんど変化がみられなかった(表2)。

表2 館林城下における戸口の推移

	戸数	人口
延宝2年(1674)	806	3,739
宝永5年(1708)	802	—
享保13年(1728)	—	4,945
天保7年(1836)	—	3,259
弘化3年(1846)	854	3,205
安政2年(1855)	1,013	3,932
明治2年(1869)	1,063	4,432

『館林市誌 歴史編』(1969)

『群馬県史 資料編16』(1988)より作成

越智松平氏による城郭の再築直後の城下町を知りうる絵図はないため、ここでは秋元氏支配時の2枚の絵図を検討する。まず、図4をみると、上述のように城郭の形態が大きく変わり、郭内の侍屋敷地区が拡大していること、その北部の加法師にも侍屋敷が広がっていることがわかる。ただし、ここは綱吉時代より縮小し、土居と堀で囲われてはいない。また、二の丸・三の丸にあった侍屋敷はまったくみられなくなり、公用地化が進んだことがわかる。そして、三の丸西の外郭には、秋元氏の入封にともなって移築された菩提寺の泰安寺がみえる。

さらに、図5で町屋地区を詳しくみると、その形態は、図3と比較して、本紺屋町の屋敷裏にあった町屋が畑に変化した以外は、酷似していることがわかる。そのなかで、風呂屋町が並木町に編入されたこと、塚場横町が横町と記されていることが異なる。江戸口の南には日光脇往還に沿って町屋が伸びているが、ここは、谷越村の一部であり、町立てはされていない。この絵図では検断の給田百姓39軒分が記載されている。さらに、加法師口に向かう道沿いには、御用地と区分されている土地に屋敷割がみられる。絵図には加法師40軒と記載があるので、町立てされていないものの、拝借地に町屋が連なっていると判断される。

綱吉時代との大きな違いは、惣構え内北西部の侍屋敷・蔵屋敷・組屋敷となっていたと

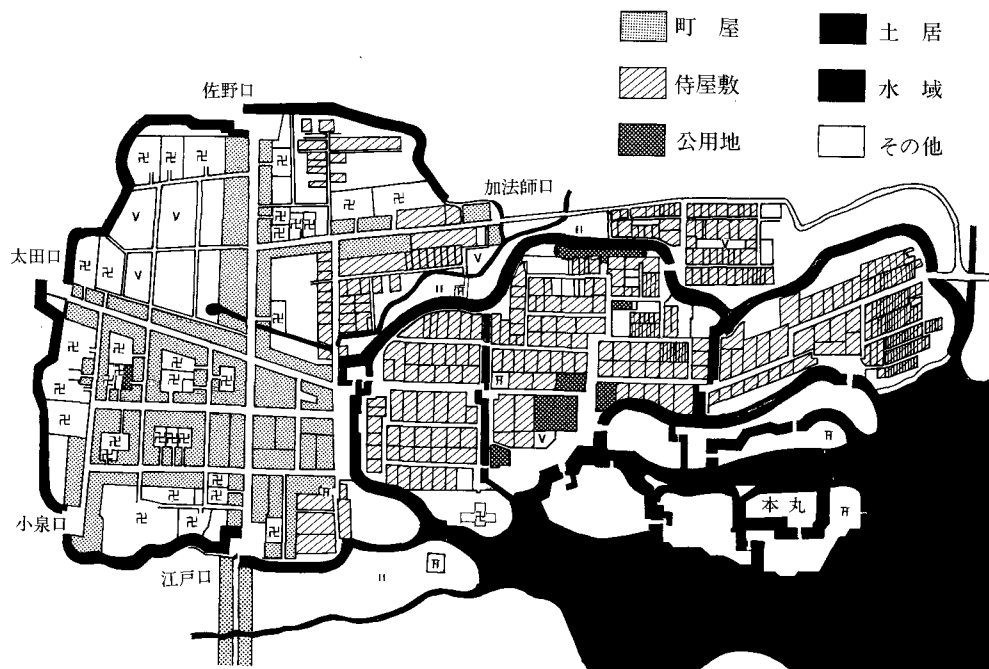


図4 幕末期の館林城下町の地域制 (秋元時代「館林城絵図」より作成)

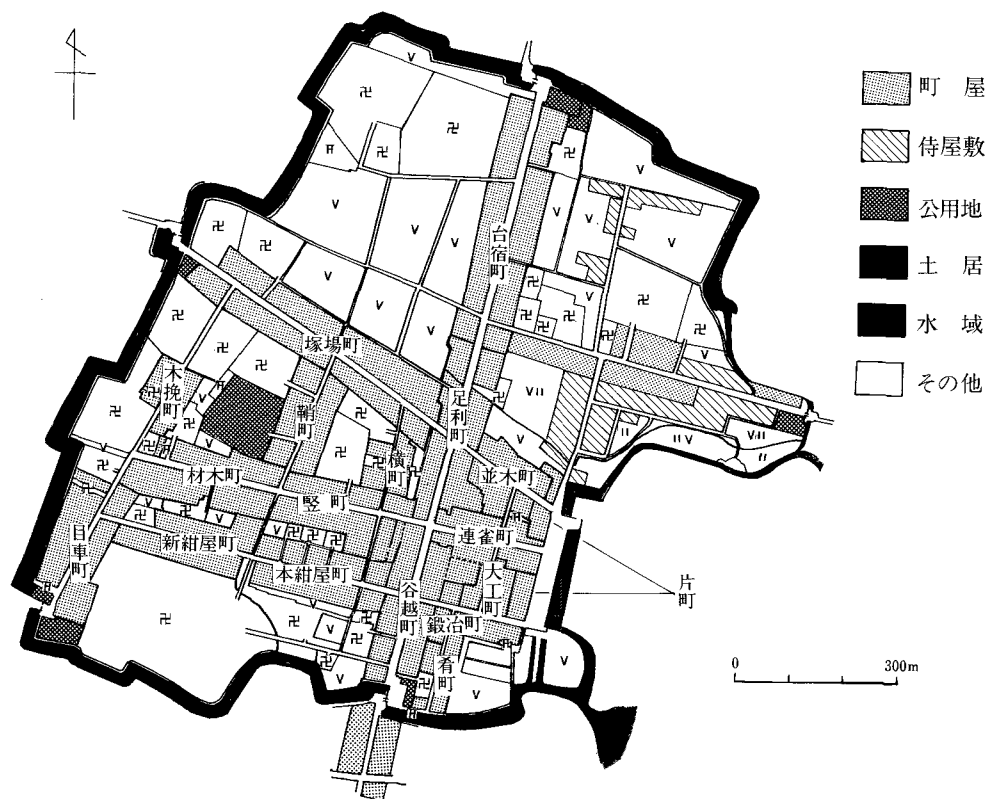


図5 嘉永元年(1848)の館林城下町の地域制 (秋元時代「館林城下地図」より作成)
待屋敷には組屋敷を含む。

ころが、すべて畑に変化していることである。また、北東および南東部でも、寺院や侍屋敷・組屋敷の一部が畑になっている。綱吉の家臣の大半は江戸で藩経営に携わっていたとはいえ、25万石と6万石の藩規模の違いがこのような変化に現れていると考えられる。

ここまで、4枚の絵図や史料を検討した結果から明らかなように、館林城下町は、文禄期に形成された総郭型のプランが幕末まで維持された。しかし、詳細にみれば、さまざまな変化を見出すことができる。大給松平時代までに確立された明確な地域制は、綱吉時代になると、やや弛緩した。さらに、城郭再建後の館林では、加法師の侍屋敷地区は惣構えで囲まれることはなくなり、江戸口・加法師口においては惣構えの内外への町屋の伸張がわずかながらも生じている。その一方、惣構え内部の空地は、正保の絵図にはあまりみられず、延宝の絵図には「空地」とあったが、嘉永の絵図では「御用地畑」となっている。このように畑の面積が拡大し、一種の空洞化の進行が生じている。矢守は、館林について、総郭内に「御用地畑」なども囲い込んでいる点、総郭型のうちでも古いタイプに属すると述べたが¹⁸⁾、むしろ前期城下町の明確な地域制が次第に弛緩したため、変容系列に逆行するようなプランがみられるようになったといえる。

III. 館林の城下町プランの特色

(1) 寺社の配置

正保期以降、町人地全体の枠組みは、木挽町の新設・風呂屋町の併合以外はほとんど変わっていない。それに対して、武家地や寺社地では変化がみられた。そこで、ここでは、城下における寺社地と町人地の両要素を分析することによって、館林の城下町プランの特色をみたい。

まず、城下における寺町の構成と寺社の配置を考察するため、延宝2年と嘉永元年の絵

図より検出した寺院の一覧を表3に、寺院の分布を図6に示した¹⁹⁾。

大坂の寺院と町とのかかわりを検討した伊藤毅によれば、①城下の縁辺部に寺町を形成するもの(「寺町」型)、②町のなかに散在する寺院(「町寺」型)、③城下に接する在方に立地し、門前や子院地区を付属するもの(「境内」型)という三つのタイプが設定されている²⁰⁾。館林の場合、寺内町を形成するような「境内」型寺院はみられない。

城下の寺院のうち、榊原康正によって移転されたとされる寺院には、善導寺(1)・法高寺(30)・円教寺(31)などがある。これらの配置をみると、防衛的機能が考慮され、城下町の外縁部に大規模な寺院が置かれ、寺町が形成されていることがわかる。それも浄土宗寺院は南西部に、真言宗寺院は北西部に、禅宗寺院と法華宗寺院は北東部に偏在してみられるなど、寺院を統制した計画性の高さがうかがわれる。最も広い面積を誇る善導寺は、100石の御朱印地を与えられた榊原康政の菩提寺であった。また、長福寺(13)は時を知らせる寺で、もとは城内に置かれていたが、手狭になったため鞆町に移転、さらに牢屋敷の移転によって西端の木挽町に移り、応声寺と改められた。覚応寺(12)は羽附村大袋より城代金田正勝によって移転された。図2をみると、正保期には、ここは奉公人町と蔵屋敷であったこと、また、城代の下屋敷には盛岩寺があったことがわかる。

一方、もともとこの地にあったという伝承を持つのは、千眼寺(14)のみである。町屋地区のブロックの中央の閑所には、千眼寺をはじめとする「町寺」型の中小規模の寺院が位置していることがわかる。浄土宗の2院を除くと、すべて真言宗寺院であり、真言宗が館林における宗派の中心となっていた²¹⁾。

嘉永元年になると、興蔵寺(20)の山伏の住院であった東学院(33)・真明院(34)・金蔵院(35)が興蔵寺持の土地となっているこ

表3 館林城下の寺院一覧

	延宝2年(1674)	嘉永元年(1848)	境内社	延宝2年(1674)	嘉永元年(1848)	境内社	
1	浄土宗 善導寺	同		22	真言宗 惣徳院	同	稲荷八幡社
2	浄土宗 見松院	浄土宗 大道寺		23	真言宗 正泉院	同 (跡)	
3	浄土宗 不断院	浄土宗 護念寺		24	真言宗 正福院	同 (跡)	長良神社
4	真言宗 宝幢寺	同	青梅神社	25	真言宗 天福寺	同	
5	真言宗 円蔵院	同	<天王>	26	真言宗 五宝寺	同	
6	真言宗 福寿院	同	清龍神社	27	真言宗 観音院	同	
7	真言宗 真照院	同		28	真言宗 延命院	同	
8	真言宗 地福院	同		29	真言宗 不動院	同	
9	真言宗 東光寺	同		30	法華宗 法高寺	同	
10	真言宗 法性院	同	<天王>	31	法華宗 円教寺	同	
11		同		32	禅宗 法林寺	禅宗 法輪寺	
12	一向宗 覚応寺	同		33		—	
13	時宗 長福寺	時宗 応声寺		34		—	
14	真言宗 千眼寺	同	稲荷社	35		—	
15	真言宗 聖天院	同 (跡)		36	禅宗 広済寺	—	
16	浄土宗 一行院	同		37	—	多門院	
17	浄土宗 常光寺	同		38	—	天台宗 高德寺	
18	真言宗 自性院	同		39	—	荒沢院	
19	真言宗 観音寺	同		40	—	真言宗 密蔵院	<天王>
20	真言宗 興蔵寺	同	愛宕神社	41	—	重宝院	
21	禅宗 法泉寺	同					

宗派は絵図の記載に基づく。延宝「館林城下町絵図」・嘉永「館林城下地図」より作成。

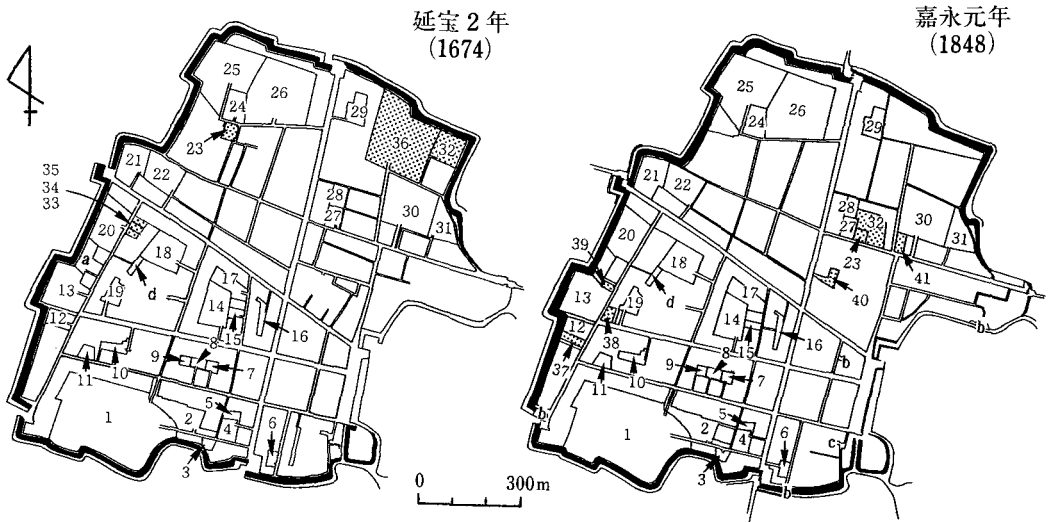


図6 館林城下の寺社の配置 (延宝「館林城下町絵図」・嘉永「館林城下地図」より作成)

a : 秋葉神社, b : 稲荷社, c : 金山神社, d : 山神宮。アミかけ部分は異動のある寺社地。

と、正泉院(23)・法輪寺(32)の移転、広済寺(36)の廃絶という変化がみられる。広済寺は、大給松平氏の転封とともに移転した竜

岩寺の跡に、徳川綱吉が開基したもので、1000石の御朱印地が与えられた。延宝2年の絵図にも大きな境内が描かれている。しかし、館

林城破却とともに、この寺も廃絶し、北東部の禅宗寺院の境内は畑へと変化したのである。

一方、この期間で、新たに加わった寺院には多門院(37)以下があるが、いずれも「町寺」型の小さな寺院であることがわかる。このうち多門院・荒沢院・重宝院は、加納院(11)を含めて、修験の寺院である。興蔵寺は絵図には真言宗と記載されているが、上野国最大の配下33院をもつ本山派修験であった。これらの修験寺院の展開は、町人の信仰によるものであろう。また、密蔵院(40)には足利町の天王が祀られている。これは、法性院(10)に祀られている豎町の天王、円蔵院(5)に祀られている谷越町の天王とともに、三天王と呼ばれた。

なお、神社についても言及すると、神社の多くは寺院の境内に鎮座する。その中でも最も創建が古いとされるのは、興蔵寺境内の愛宕神社である。文禄年間(1592～1596)には、館林の総鎮守とあがめられ、城主が入れ替わるたびごとに社殿が改装され、歴代の城主の祈願所として信仰が厚かった。長良神社は赤井氏が築城の際、天福寺境内に勧請したもので、城下の総鎮守として信仰を集めた。青梅神社は赤井氏が城中鎮護のため城南の地に勧請し、その後、榊原康政がこの場所に鎮座したものである。

また、寺院と独立した神社には稲荷社が多い。絵図に描かれていないものも含めて、明治初年には町内に13社を数えた。館林城には、稲荷にまつわる築城伝説がある。その伝説とは、赤井氏が狐の導きによって選地し、狐が尾を曳いて縄張りを教えたというものである。それゆえ館林では、稲荷信仰に厚いものがある。惣徳院境内の稲荷八幡社も、稲荷郭の尾曳稲荷神社と城内の八幡社から徳川綱吉が寛文7年(1667)に勧請したものである。惣構えに近接する稲荷社もこうした流れをくむものであろう²²⁾。このほか、金山神社は位置的にも鍛冶町との関連が示唆されるし、愛宕神社・

秋葉神社が西端に位置することは、冬季の北西季節風の風上の地に火伏せの神を祀ることを意図したものと見えよう。

以上のように、館林では、惣構えの防御を固めるように、計画的な寺社の配置が行われた。とくに寺院については、城下町の形成期における移転、領主の交代にともなう改廃がみられたように、領主による強い統制のもとにあったといえる。

(2) 町人地の町割と屋敷割

ここでは、町人地の内部構成を考察するため、町割と屋敷割のパターンの特徴をみたい。

まず、図7によって延宝2年の町割と屋敷割をみると、それぞれの町は、街路を挟んで間口を向き合う町屋で、一つの町を形成する両側町となっていることがわかる。唯一の例外は、大手門前に展開する片町である。

街路で囲まれたブロックの形状は、連雀町・豎町の付近では、ほぼ基盤型となっている。それらのブロックでは、間口は四辺または三辺に向けて開かれており、江戸型の屋敷割がみられる。江戸型の屋敷割の開所は、公用地・寺社・畑地などに利用されている。一方、太田往還や日光脇往還の北部では、間口を二辺のみに開く京型屋敷割が卓越する。江戸型から京型へという屋敷割の時系列変化を前提にすれば、この点から、古いプランのみられる連雀町をはじめとする大手門周辺の町と、その他の町との違いが際立つ。

次に、大手門から太田口に伸びる太田往還を含む東西方向の3本の街路と南北方向の日光脇往還の3ヶ所の交点に注目すると、連雀町が日光脇往還に接するところまで町域を広げて側壁を向けている以外は、絵図に記載されている表と裏の間数で判断すれば、表は日光脇往還に向いていることがわかる。この点では、大手道に直交する道沿いに町屋の間口が連なる横町型プランである。しかし、日光脇往還に沿う町以外は、並木町・塚場町、連

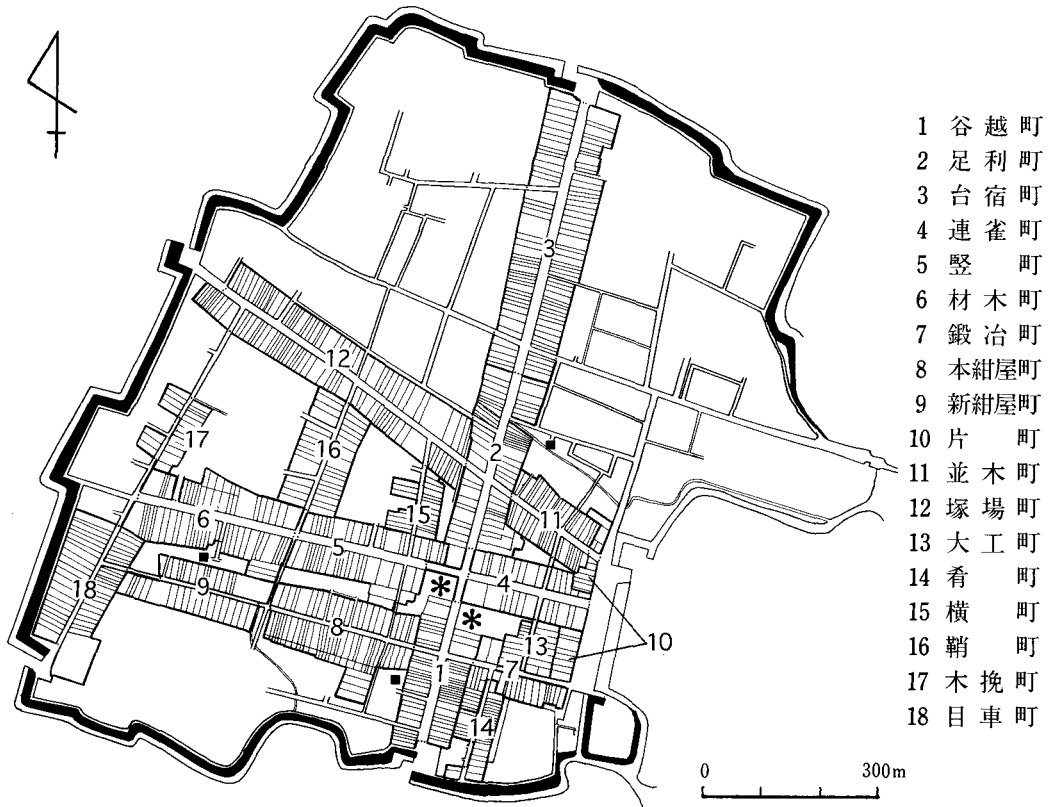


図7 延宝2年(1674)の館林城下の町割と屋敷割(「館林城下町絵図」より作成)

*は検断の屋敷, ■は牛頭天王の祭祀地を示す。

雀町・豎町・材木町, 鍛冶町・本紺屋町・新紺屋町が大手に対して縦に並んだ町割となっており, 大きくみれば, 豎町型プランを基調にしているといえる。

なお, 太田往還は他の東西方向の街路が日光脇往還とほぼ垂直に交わるのに対して, その方位がずれている。これは明らかに, この道の延長線上にある城を見通すヴィスタが意識されて計画的に設定されたものだろう。

このように, 榊原氏入封以前に起源をもつ連雀町・豎町などには, より古い町割・屋敷割の形態が残存しており, 天正期には, 城地との関係のみれば豎町型プランをとっていたと推察される。その当時には城を強調する城下町建設が図られた。しかし, 慶長期に江戸から日光へつなぐ日光脇往還を組み入れた時点で, 館林では横町型プランを採用し, 城下町を交通・流通・経済の中心にしようとした

と考えられる。

次に, 図8によって嘉永元年の町割と屋敷割をみると, 全体的に町屋の細分化が進み, 間口が小さくなっていることがわかる。この絵図によって, 矢守は「両主要路の交差点の屋敷割りには, おおむね大店が占めていていずれに〈頬〉を向けているとも判断しかねるケースが多いが, 強いていえば豎町型優位である」と述べている²³⁾。延宝期同様, 谷越町と足利町は日光脇往還に間口を向けているが, 連雀町は向けていない。しかし, 連雀町の屋敷裏の部分が日光脇往還に面するように分割されていることから, 日光脇往還の優位が進んだことがわかる。ただし, 南北方向の町通りの発展は, 江戸口から伸びた給田地の屋敷しかみられない。それゆえ, 館林では, 横町型プランを採り入れたが, 町屋地区の再編は十分に進まなかったといえる。

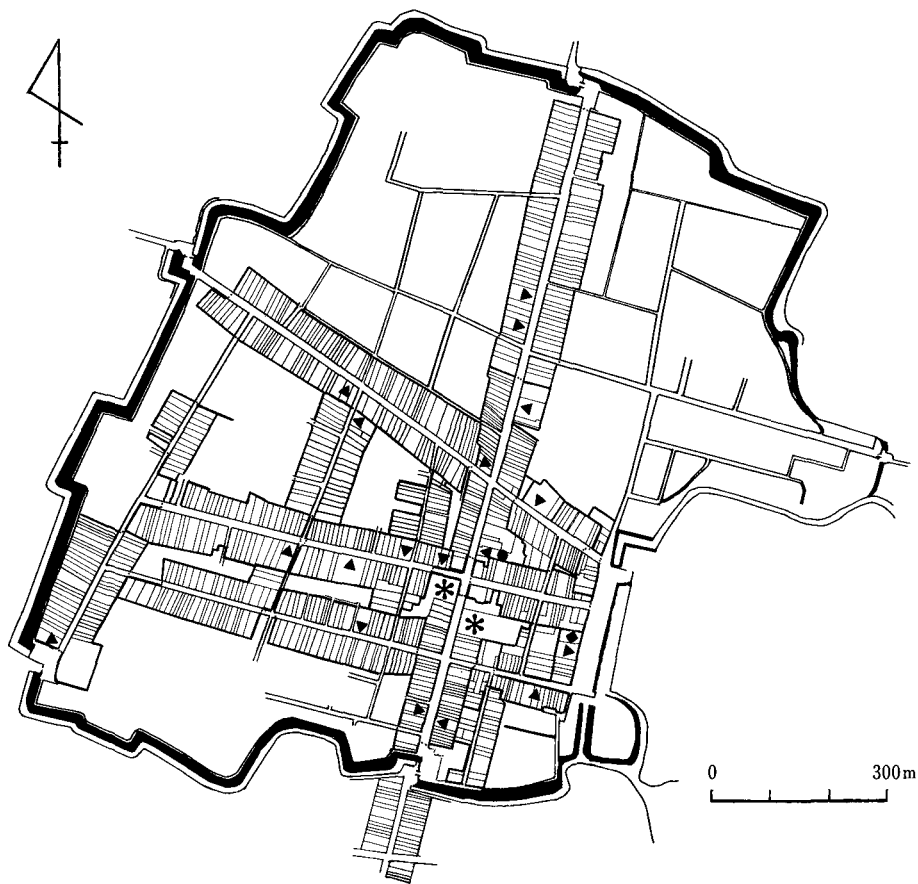


図8 嘉永元年(1848)の館林城下の町割と屋敷割(「館林城下地図」より作成)
 *は検断, ●は本陣, ◆は問屋, ▲は町年寄・名主の屋敷を示す。
 ただし、姓のない名主で特定できない2軒を除く。

表4には、この間の戸数の増減率を示した。最も高い増加率を示したのは連雀町である。連雀町では、延宝期には5～6間の間口が卓越していたが、嘉永期になると町屋の細分化が著しい。このほか増加率の比較的高い町として、足利町・堅町・新紺屋町・目車町があげられる²⁴⁾。一方、町屋の併合が進んで戸数が減少した町には、並木町・肴町があり、図でも町屋の間口の拡大が確認できる。並木町については、天保7年(1836)に「貧町にして町役が難儀いたし候」という記述があり²⁵⁾、困窮のため戸数が減少したと考えられる。

また、表4に示した流入戸数は、宗門人別帳ができあがった後に館林城下に引っ越してきたものを、嘉永元年に書き上げた記録より

算出したものである²⁶⁾。104軒の流入元をみると、館林町内43軒、領内30軒、上野国内13軒、国外18軒と、町内での移動が多い一方、他国からの流入もみられるなど幅広い動きがある。また、これらのうち85軒が借家人である。その割合が高いのは、連雀町・堅町・鍛冶町・大工町・横町などで、この時期の館林では、日光脇往還・太田往還に面した町よりも、町の中心に近い裏通りに面した町で、借家経営が進展していたと推測される。

IV. 館林の町人地の地域構成

(1) 町の支配構造と天王祭

ここまで城下町の空間形態の分析を進めてきたが、最後に町人地の社会構成についても

表4 館林城下における町別の戸数の推移

	町名	延宝2年 (1674)	嘉永元年 (1848)	増減率 (%)	流入戸数 ()は借家人
1	谷越町	58	60	3.4	5 (3)
2	足利町	59	73	23.7	— (—)
3	台宿町	98	90	-8.2	4 (4)
4	連雀町	28	45	60.7	13 (11)
5	堅町	46	54	17.4	15 (14)
6	材木町	56	49	-12.5	3 (1)
7	鍛冶町	25	28	12.0	6 (6)
8	本紺屋町	59	55	-6.8	13 (4)
9	新紺屋町	36	50	38.9	— (—)
10	片町	21	21	0.0	2 (2)
11	並木町	42	30	-28.6	5 (5)
12	塚場町	106	109	2.8	6 (6)
13	大工町	19	18	-5.3	9 (9)
14	肴町	36	24	-33.3	— (—)
15	横町	22	24	9.1	9 (9)
16	鞆町	32	34	6.3	5 (5)
17	木挽町	20	22	10.0	1 (1)
18	目車町	41	58	41.5	8 (5)
	風呂屋町	2	—	—	— (—)
	合計	806	844	4.7	104(85)

町の番号は図7に対応する。

戸数は延宝「館林城下町絵図」・嘉永「館林城下地図」, 流入戸数は「館林町家数追調帳」(1848)より作成。

考察し、両者の関係をみたい。館林の町方支配機構の特色は、検断を最高位の町役人として置き、町政にあたらせたことである。検断は中世からの役職であり、赤井氏支配当時より土豪である青山氏と小寺氏の両家が世襲していたといわれる²⁷⁾。大袋城から約300m南には、青山屋敷と呼ばれる環濠をもつ城館遺構が存在する²⁸⁾。検断の由緒書きによれば、両家は榊原氏の支配に入っても検断職を引き続き勤め、大阪冬の陣に同行、苗字帯刀も許されるなど、家臣同様の扱いを受けた。また谷越村を開発し、青山氏19.999石、小寺氏22.008石の給田地を領主が代わっても保持しつづけた。弘化3年(1846)の「町方引渡帳」²⁹⁾には給田地の家数43軒とある。この給田地のほか、徳川綱吉より7人扶持を下され、その後も郷目付役7人扶持に代官役3扶持を加えた計10扶持を与えられ、転封の相次ぐ館林藩にあって、検断が町方・在方の支配を取り仕切った。

検断は月番で交代し、毎日、町奉行所に詰

め、町の警備・防火の差配・市日の指導・祭礼の執行などを町年寄とともに行った。訴訟の際には、書類を名主が吟味し町年寄に差し出し、問題があるときには検断に達し、さらに両名で解決できないときに町奉行に申告する仕組みになっていた。

町年寄の定員は7人であるが、署名にみえる姓名には異動があり、検断のような世襲制ではないことがわかる。名主は町に一人といった原則はみられず、複数の町を兼帯する名主も多く、また町内には在方の名主を兼帯するものもいた。

図8には、絵図に記されている町役人の屋敷に記号を付した。町役人のトップに立つ検断の青山氏と小寺氏の谷越町にある屋敷地は、日光脇往還に面し、間口22間余と非常に大きい。この検断を補佐する町年寄と名主の屋敷は各町に分散している。町役人を勤める家は経済的地位を反映して、間口の大きな屋敷地が多い。しかしながら、世襲制の検断の屋敷地の形態が延宝期から変化していないのに対して、町年寄と名主は入れ替わりがあり、その屋敷地の形態も延宝期とはかなり異なっていることがわかる。また、館林の本陣は、図8に示したように、足利町の大島氏がその職にあった。

さて、検断の職務の一つに祭礼の執行がある。都市の祭礼には、日常的な人的な関係を背景にした町の構造が反映されているとの視点に立ち³⁰⁾、館林の祭礼のあり方をみたい。城下最大の祭礼である天王祭は、図7に示した谷越町・足利町・堅町の3町の牛頭天王の祭である。延宝期頃までに、六斎市がこの3町に移され、祭が盛大に行われるようになった。延宝期の絵図には、足利町の天王は同心組屋敷の小さな路地に小さく「天王」という記載があるだけであるが、秋元時代の「館林城絵図」には、密蔵院の境内に天王の社が描かれていることは、この間の経緯をうかがわせる。

天保4年(1833)の定め書きによれば³¹⁾、こ

れら3町の天王の祭礼には、城下のすべての町が三分して加わっている。豎町には連雀町・横町・鞆町・木挽町・材木町という中央の町、谷越町には片町・大工町・鍛冶町・肴町・目車町・新紺屋町・本紺屋町という南の町、足利町には並木町・塚場町・台宿町という北の町が属する。この定め書きの署名をみると、まず18町の惣代2名ずつの連署、その後13人の名主の連署があり、天王祭が惣町の祭礼であったことがわかる。

この祭礼には年番・助番が定められていたが、豎町の年番のときの祭行列の順序は、初日が足利町・谷越町・豎町、2日目が豎町・谷越町・足利町となっている。このように、祭礼での負担や行列順などには各グループ間の平等性が貫かれている。

祭の前後、5月晦日から6月15日まで、各町の入口を中心として16ヶ所に注連縄が張られた。これは疫病を防ぐためと考えられるが、その基本的単位は個別の町にあったことが示唆される。初日6月6日には、三つの天王の祭行列が片町にそろって城内に入り、町奉行の検分を受け、連雀町通りで両検断の前で狂言を演じ、各町に戻った。2日目の6月7日にも入城の後、各町内を笠鉾山車や造物屋台を引いて回った。天王祭は町外からも奉仕者が出るなど、町内外の領民にとって最も大きな娯楽であった。それは大手門内の武家地に入ることのできる唯一の機会でもあった³²⁾。

三つの祭行列のグループは、城と町人地をうまくつなぐように、城に対して縦方向に組まれていた。そして祭行列がそれぞれの町を巡回することによって、谷越町・足利町・豎町を頭にした各グループの町のつながりが空間的にも意識されたと推察される。

(2) 町人地の機能と地域構成

館林では、六歳市が商業活動での大きな役割を果たした。城下町成立期の経緯については『館林記』に次のように記されている³³⁾。

「天正十二年（1584）申二月小田原ヨリウイロウト申、葉売来り小寺丹後所へ宿取売申候、其後丹後申様、当地カ先規ニハ六斎ノ市立候処、暫ク中絶ニテ市ナシ、近郷村ニテ何卒市立度由申候旨物語、ウイロウ売聞テ申様、然ル上ハ氏直候へ願上、市立由申候得バ、右邑楽郡佐貫町ノ市神ノ訳、御尋ノ上、……市都へ罷越フタタビ市神鎮座之上、商人連雀町ノ頭ハ飯島ニ仰付ラレ諸商売ノ荷物問屋ハ鈴木へ仰付ラレ、夫ヨリ六斎ノ市相続仕候」

このように北条氏直の支配のもとで、おそらく戦乱によって中断していた六歳市が、飯島源右衛門を連雀町の頭にして再開され、市神が鎮座されたことがわかる。ただし、飯島の名は延宝期の絵図にはみられず、その経緯は不詳であるが、六歳市は谷越町・足利町・豎町の3町で巡回されるようになった。市の場の再編成は、城下町全体の繁栄をねらったものであろう。

また、連雀町では古来より古着市が立ち、享保13年（1728）に市場絵図を提出するなど、その市が認められてきた。宝暦期（1751～63）には、商人がみだりに「見世張商売」する状態になり、市場の取締を厳しくしたものの、明和期（1764～71）になると、足利町の市日に古着商人が連雀町で「見世張商売」したため、難儀するようになった足利町にも古着市を立てられるようにとの訴えが出された。この訴えは認められたが、その後、古着市取締の際、連雀町に古着市を立てるようにと定められ、文化12年（1815）には再び足利町から異議をとなえる訴えが出されている³⁴⁾。この史料によれば、「市人家主相対次第相廻り見世場可相定者也」とあり、見世の場所が定められていたことがうかがえる³⁵⁾。

館林の市日は3・8のつく日で、安政期の主な商品は「木綿白縞」、夏から秋には「桃・瓜・茄子・西瓜」が在方より持ち出された³⁶⁾。

館林周辺の松原村・羽附村・赤生田村の3ヶ村を中心とする村々は、野菜・果物の特産地

であった(図1参照)。3ヶ村には榊原氏の時代より館林城内および町内で小売り・振売りする権利が保証され、徳川綱吉の時代には、栃木・小山・佐野・足利・桐生・小泉・太田・行田・熊谷などの広範な販路を獲得した。

その後、寛政4年(1792)、特権をもつ3ヶ村と館林城下の青物商人との間で紛争が生じた。その要因は、3ヶ村がおもに江戸口の木戸内の広場で青物を捌いていたものが、材木町・台宿町・片町の間屋まで持ち込むように求められたことにあった。このときは、町内の利益となるよう谷越町から大辻の間で青物の売買を行うこと、谷越町が市日の時には連雀町・堅町・足利町の大辻で売買を行うこと、城下の世話人に100文につき4文の口銭を支払うことなどが決められた³⁷⁾。しかし、文化13年(1816)には、連雀町・塚場町の新規の青物商人が3ヶ村に相対売りを禁じ、問屋を通すように求めたために再び抗争がおきている³⁸⁾。この対立には、城下の商人が利益を拡大しようとして画策したさまがうかがえ、商品流通の結節点として城下町が機能していたことがわかる。

また、安政期には「当町之義商渡世之間農業仕、女者糸撚機織仕候 産物 木綿 同糸同縞類 江戸出も仕候」という記述がみられ³⁹⁾、館林では、商いのかたわら農業を行い、女性は糸撚・機織に従事し、機業地の一部としても発達していたことを知りうる。この時期の御用商人をみると、谷越町13人、足利町9人、連雀町8人と続く⁴⁰⁾。これらのことから、六歳市の巡回した谷越町・足利町・堅町、かつての市町で古着市の立った連雀町が、館林の商業活動の中心となっていたといえる。

なお、『館林記』には、各町が板葺きか萱葺きかを記載している。それによれば、板葺きは谷越町・足利町・連雀町・堅町・片町・並木町、板葺きと萱葺きが混じるのは本紺屋町・塚場町、残りはすべて萱葺きの町である。板葺きの町屋は、火事の際に郭内への延焼を防

ぐねらいがあったと考えられるが、それを負担しうる大手門前と主要街道に沿った商業活動の中心に偏在していたともいえよう。

さらに、高札場は上意の発源地たる城の大手門前、下達さるべき民衆の目にふれやすい往来の多い町通りを一般的に選ぶといわれるが⁴¹⁾、館林の場合、大手門から太田口に至る通りではなく、連雀町・堅町の通りと日光脇往還の交点に設定されている。ここは、検断小寺氏の屋敷をはじめ大きな町屋が並び、商いも盛んで、城下町の中心として意識された場所と考えられる。

一方、職人の構成について詳しく知りうる史料はないが、弘化3年(1846)の「町方引渡帳」によると、大工16人、左官8人、畳屋7人、萱屋根師2人、板屋根師4人、木挽2人、石屋2人、研屋3人、箆屋4人、桶屋8人、指物屋8人、塗師屋3人、鍛冶屋12人、紺屋9人、鋳物師1人の合わせて89人の職人数が記されている⁴²⁾。

また、鍛冶町・大工町・鞆町・木挽町・本紺屋町・新紺屋町といった職人名に由来する町には、城下町建設当初は、職種別に職人が配されたと考えられる。それぞれの職人町の位置関係は、木挽町と材木町、鍛冶町と大工町といったつながりのある町が近く、かつ主要街道ではない通りに配されているという特徴があげられる。木挽町については「木挽職小間五間ニ式拾人、式間半拾人ツ、役相勤候ニ付、人馬役火之見番役先々ヨリ免許之」という記述がある⁴³⁾。これにより、木挽町では、木挽職を勤めたことで人馬役などが免除されていたこと、間口5間が役負担の単位になっていたことが知られる。

V. おわりに

本稿では、さまざまな史料・絵図を用い、館林の城下町プランの特色を考察してきた。以下、得られた知見を要約する。

館林城下町は、16世紀前半、青柳、大袋、

館林と居城を移してきた赤井氏が、青柳にあった佐貫町を移転させたことに始まる。そして、長尾氏の城郭拡張工事にともない城郭の西側の大手門前に町が形成され、その後、榊原氏によって文禄期に惣構えが築かれ、慶長期には後の日光脇往還が組み入れられて、多くの町が成立した。それと同時に、侍屋敷・組屋敷・町屋・寺町という用途別地域制が整えられ、なかでも寺町には計画的な寺院配置がみられた。館林城下町は、文禄期に形成された総郭型プランが幕末まで維持されたが、前期城下町の明確な地域制が次第に弛緩したため、嘉永期には、惣構え内に大きな畑の広がる、変容系列に逆行するプランがみられるようになった。

町割と屋敷割をみると、日光脇往還沿いでは連雀町の町屋以外はすべて間口を向けており、その優位性が認められる。しかし、大きくみれば、並木町・塚場町、連雀町・豎町・材木町、鍛冶町・本紺屋町・新紺屋町が大手に対して縦に並んだ町割となっており、豎町型プランを基調にしているといえよう。そして、天王祭での谷越町・足利町・豎町の各グループも、城と町人地をうまくつなぐように、城に対して縦方向に組まれていた。

榊原氏入封以前に起源をもつ連雀町などの大手門近くの町では、町割・屋敷割により古い形態が残存しており、天正期には、豎町型プランをとり、城を強調する城下町建設が進められたと考えられる。そして、慶長期に後の日光脇往還を組み入れた時、横町型プランを採り入れたものの、その後の町屋地区の再編は十分に進まなかったといえる。

館林では、領主が頻繁に国替えを命じられ、在地性に乏しかったが、検断職の青山氏と小寺氏によって継続的に町方の支配がなされた。館林の札の辻付近には、検断の屋敷など大きな町屋が並び、城下町の中心として意識されたと考えられる。そこは、かつての市町の連雀町、六歳市の立った谷越町・足利町・豎町

が位置する商業活動の中心でもあった。

このように、館林城下町では、城下町建設当初からの総郭型のプランが維持され、横町型プランへの展開も十分には成し遂げられなかった。同じ総郭型の高崎の場合、中山道・三国街道に沿って、惣構えの外に六つの町が形成されたが⁴⁴⁾、町屋の成長力が十分でなかった館林では、町の開放は進まず、総郭型・豎町型という古い型のプランが幕末まで見いだされた。

(群馬大学教育学部・太田市立城西中学校)

〔付記〕

本稿は、木部の提出した1996年度群馬大学教育学部卒業論文をもとに、新たな資料の収集とその分析を加えて関戸がまとめたものである。

本稿の作成にあたり、多くのご教示をいただいた岡屋紀子さんをはじめとする館林市教育委員会文化振興課の方々に厚くお礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 矢守一彦『都市プランの研究』、大明堂、1970、247～341頁。
- 2) 矢守一彦『城下町のかたち』、筑摩書房、1988、3～84頁。このほか、豎町・横町の類型については、次のものでも議論されている。足利健亮『中近世都市の歴史地理』、地人書房、1984、221～230頁。宮本雅明「城下町の類型－縦町型から横町型へ－」(高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、1993)、172～173頁。
- 3) 宮本雅明「城下町の空間類型」『年報都市史研究2 城下町の類型』、山川出版社、1994、3～15頁。
- 4) 金井年「城下町プランの類型化－主に矢守類型についての若干の再検討－」、日本学報16、1997、31～45頁。
- 5) 『館林記』(『群馬県史料集 第2巻 風土記II』、群馬県文化事業振興会、1967)、203～253頁。
- 6) 館林城調査委員会編『館林城調査報告書 第1集 城郭図とその変遷』、館林市教育委員会文化振興課、1994、115頁。
- 7) 館林教育委員会による写真版を利用した。な

- お、図3, 5, 7, 8の縮尺と方位については、絵図を実測図に比定して求めた。
- 8) 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系23 愛知県の地名』, 平凡社, 1987, 669頁。
 - 9) 以下の記述では次のものを参照した。
 - ①館林市誌編纂委員会編『館林市誌 歴史編』, 館林市, 1969, 119~163頁。
 - ②群馬県史編さん委員会編『群馬県史通史編4 近世1』, 群馬県, 1990, 175~213頁。
 - 10) 『館林記』, 前掲5)206頁。
 - 11) 『館林記』, 前掲5)207~208頁。
 - 12) 日光脇往還と呼ばれた理由には二つの説がある。一つは、元和3年(1617)に徳川家康の靈柩が通るにあたって街道が大改修された時からであるという説である(『館林市誌』, 前掲9)①, 768頁)。もう一つは、寛永13年(1636)に日光東照宮の大造営が完了し、江戸と日光を結ぶ街道として日光例幣使街道と並んで利用されるようになってからという説である(『群馬県史通史編4』, 前掲9)②181頁)。
 - 13) 年次不詳「館林町検断町方古例大概書上」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編16 近世8』, 群馬県, 1988), 210~214頁。
 - 14) 『館林記』, 前掲5)251頁。
 - 15) 『群馬県史通史編4』, 前掲9)②188~189頁。
 - 16) 『館林記』, 前掲5)252頁。
 - 17) 『館林城調査報告書』, 前掲6)。
 - 18) 矢守著書, 前掲2)131頁。総郭型には、侍屋敷と町屋とが混在する型と分化されている型というサブ・タイプがある。前者では、惣構えのなかに田地をも包含することが多いが、後者になると、道路に直交状の形態が卓越してくるといふ(矢守著書, 前掲1)252頁)。
 - 19) なお、絵図のほか、『館林市誌』, 前掲9)①835~845頁, 881~917頁, を参照した。
 - 20) 伊藤 毅「近世都市と寺院」(吉田伸之編『日本の近世9 都市の時代』, 中央公論社, 1992), 81~128頁。
 - 21) 昭和14年の群馬県下の寺院調査によれば、全寺院の30%が真言宗寺院で、それも東毛の邑楽・新田・佐波郡に偏在している(群馬県史編さん委員会編『群馬県史通史編3 中世』, 群馬県, 1989, 886~887頁)。
 - 22) 縄張りのさい、他所者にとって危険な土地魂の荒魂を鎮める手段として、稲荷が考えられていたという指摘との関連も示唆される(野沢謙治「域下町会津若松のトポス(一)一都市におけるハレの発見」, 日本民俗学165, 1986, 1~15頁)。
 - 23) 矢守著書, 前掲2)131頁。
 - 24) 目車町の戸数には、小泉口の前の間口40間余の屋敷地に記されている、延宝期2名, 嘉永期8名の釘打ちを含む。
 - 25) 天保7年(1836)「井上氏入封につき館林町方問合答書留」『群馬県史資料編16』, 332~339頁。
 - 26) 嘉永元年(1848)「館林町家数追調帳」『群馬県史資料編16』, 144~161頁。
 - 27) 文化8年(1811)「館林町検断由緒書上」『群馬県史資料編16』, 197~201頁, および前掲13)による。
 - 28) 群馬県教育委員会文化財保護課編『群馬県の中世城館跡』, 群馬県教育委員会, 1989, 211頁。
 - 29) 弘化3年(1846)「秋元氏入封につき館林町方引渡帳」『群馬県史資料編16』, 161~168頁。
 - 30) 久留島 浩「祭礼の空間構造」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門I 空間』, 東京大学出版会, 1989), 107~130頁。
 - 31) 天保4年(1833)「館林町天王祭礼定申渡請書」『群馬県史資料編16』, 836~843頁。
 - 32) 『館林市誌』, 前掲9)①851~854頁。なお、久留島は、祭りの場での城主と町人との交流によって、支配・被支配の関係を意識させたと述べる。館林の場合、町奉行の検分の後、検断の前で狂言が演じられることから、検断の地位の高さが再確認される(久留島 浩「近世における祭りの『周辺』」, 歴史評論439, 1986, 12~24頁)。
 - 33) 『館林記』, 前掲5)207頁。なお『群馬県史料集』での「ウイロウ」の注記には「透頂香の別名、…転じてこの葉売り」とあるだけだが、これは小田原で北条氏より薬の製造販売・諸役免除の特権を与えられた商人、外郎家の者と考えられる(神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史別編1 人物』, 神奈川県弘済会, 1983, 108頁)。
 - 34) 文化12年・13年(1815・16)「館林足利町古着市見世張りにつき取締方一件書留」『群馬県史資料編16』, 530~534頁。
 - 35) 上州・武州の在方市における「座」の問題を考察したものに、杉森玲子「近世前期における

- 在方市と商人」『年報都市史研究4 市と場』, 山川出版社, 1996, 17～31頁, がある。
- 36) 安政2年(1855)「館林組合村々地頭姓名其外書上帳」『群馬県史資料編16』, 230～239頁。
- 37) 寛政4年(1792)「館林町青物売買差繰出入一件書留」『群馬県史資料編16』, 550～553頁。
- 38) 『館林市誌』, 前掲9)①294～297頁。
- 39) 前掲36)。
- 40) 安政2年(1855)「町役人順席並御用医師御用達名前帳」『館林市誌』, 前掲9)①202～203頁。
- 41) 矢守一彦「御城下札ノ辻考—地域類型との関連において—」, 歴史地理学157, 1992, 43～57頁。
- 42) 前掲29)。
- 43) 前掲29)。
- 44) 関戸明子・奥土居 尚「高崎城下町の形成過程と地域構成」, 歴史地理学38-4, 1996, 1～20頁。

The Changing Process and Regional Structure of a Castle Town:
A Case Study of Tatebayashi

Akiko SEKIDO and Kazuyuki KIBE

Castle towns of Japan have been considered as examples of a typical planned cities in the feudal age. The types of change in the regional structure of castle towns and the block pattern in merchants' and craftsmen's residential district (*machiya* district) examined by Yamori (1970, 1988) have much contributed to the studies of castle towns. The aim of this paper is to delineate the process of change and regional structure of Tatebayashi castle town, focusing on the *machiya* district. For this purpose, the authors examined various historical materials and maps.

Tatebayashi castle town was located in the eastern part of the province of Kozuke in the northwest of the Kanto plain. It began to develop around 1532 by the Akai family who moved from Aoyagi and Obukuro. Under the dominion of the Sakakibara family, the whole town which contained farmlands was enclosed by the moat and embankment in 1595. Similar to most castle towns, Tatebayashi had the following spatial constituent elements: the castle, warriors' residential district, lower class warriors' residential district, *machiya* district, and Buddhist temples' district (Fig.2, 3, 4, 5).

In Tatebayashi castle town, there were two patterns of blocks in the *machiya* district (Fig.7, 8). One was rectangular blocks, and the other was square blocks. These blocks were divided into individual residential lots. It was clear that the blocks facing all sides were more numerous than the blocks facing two opposite sides in front of the *ote-mon* (the main gate of the castle). Therefore, the authors could point out the following: when the castle town was built, the direction of the street leading to the *ote-mon* was of great importance. The Ota-ohkan, the major road reaching the *ote-mon*, had a vista toward the castle. The blocks in Renjaku-cho and Tatsu-machi had the fronts facing the streets of this direction. After the Nikko-waki-ohkan (one of the main roads from Edo to Nikko) was built by the Sakakibara family and became the main route, the blocks in Ashikaga-cho and Yagoe-cho came to face the Nikko-waki-ohkan as the more important street.

During the Tenno Festival, the pageants of three groups went around in the castle and in the *machiya* district. The heads of three groups were Tatsu-machi, Ashikaga-cho and Yagoe-cho where the market was periodically held. The corner where the Renjaku-cho-dori and the Nikko-waki-ohkan intersected was the central place in Tatebayashi castle town. *Kosatsu* (the notice board on which the ordinances were written) was set up here. And two residences of *kendan* (top officers of the town) were located in Yagoe-cho near the corner of *kosatsu*. The regional structure of the *machiya* district can be summarized as follows: Renjaku-cho, Tatsu-machi, Ashikaga-cho and Yagoe-cho were the center of commercial and trading activities in the fief of Tatebayashi-han. The outer area of these *machi* was the core of manufacturing activities and the secondary core of commercial activities.